

## 西省漫詠（承前）：文苑

著者	笠間, 梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	28
ページ	55-56
発行年	1894-06-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4420">http://hdl.handle.net/2298/4420</a>

の歌に、

世の中よ樂しきものは思ふとちたなし心をかたるありけり  
とぞよめるにあらすや。あはれ、かたみに思ふ人のうちとけて、同じ心を語るより、樂  
まきことは世にあらぬぞかし。さて我等の世に生れいつる、先父母にはぐみ養  
はれ、夫れより年をへて、世の中の事わざに處するよ至る迄、いとも重んずべきは師  
友の間がらにあらすや。師友の感化は即第二の父母ともいふべきをや。我いふある  
幸をえてか、この師を仰ぎ、又この友をばてはうごきなき御世の固めども、あらむ人の數にも  
教られつ、學の業を勵みあひ、はてはうごきなき御世の固めども、あらむ人の數にも  
いらたゝんころ、あらまほしけれ。」

末あかくにこらぬ江津の水の面をかはらぬ友の鏡とや見む

西省漫詠(承前) 教授 笠間 梧園

一谷懷古

懸軍如飛鳥、雄搏下自天、疾勢不得支、諸平  
敗、爭船慘愴、鼓聲死、旗暗落日邊、回首茫茫、  
八百歲、唯見興亡、輕於煙、依然鏡、楞峰、頭月  
今日誰、吊九郎骨。

舟中夢沼田珂陽

偶爾相逢拍我肩、分明盃酒笑欣然、半宵夢  
破、茫無跡、身在須摩萬里船。

夜過壇浦

已過三十六、長灘、山轉海、回亦壯、觀今古、蒼  
茫、見殘月、興衰、遷轉付、頽瀾、萬乘天子、魂何  
在、一世、姦雄骨、已寒、颯々、海風、吹髮去、悲歌  
長嘯、倚船欄。

舟到馬關

駛潮如箭幾灣々白石洋連赤馬關到此歸  
心先一笑寸青穿眼鎮西山  
丹釀一樽遠挈提樹來嘉粟到吾臍醉中唱  
出賴翁句隔岸青山是鎮西

夜渡玄海抵博多

桅檣影凍海潮寒峨艦凌風七十灘波打鰲  
身漂二嶋月摩鯨背落三韓撚鬚聊且供長  
嘯燥髮初逢此壯觀投錨一聲天未白霸家  
臺下賀安瀾

入坑後

曾識美遊輪惡歸故林况又夢依々唯嗤行  
色沈淪甚仍舊青山映布衣  
哭弟未休還哭母悲哀三歲夢荒涼那堪今  
日提携少獨護阿爺歸故鄉

歲

暮

助教授

園

哲雄

四九光陰今欲空蹉跎未奏馭戎功窮來始  
悟男兒業多在畢生坎懷中

歲旦二首

黎民豈管仰堯天拜賀明治廿七年壽頌成  
時先試筆紙中無處不祥煙  
日往月來歲一周東山微白瑞煙稠至尊親  
拜四方處紅旭照臨六大洲

山中逢雪

硯友會員 杉山 富樫

寒風颯々凍雲昏飛雪紛々路僅存前嶺後  
峯滿皜白溪間失却數家村

孫堂先生曰非生於雪國者不能知此詩之妙

幽居初夏

江上林莊靜竹孫過柴扉雨餘新綠滴殘蝶  
送春歸

又曰惜春之意在言外

初夏新晴

細雨始收天地鮮江頭橋畔樹相連幽居不  
恨無人問萬綠叢中聽杜鵑

又曰初夏之景曲盡於結句七字中

江津湖上監督親陸會席賦上似全  
學諸子